

アリストテレスにおける
四元素の相互変化と質料的存続体
Material Continuant in Aristotle's Theory of
Elemental Transformation

岩村 岳彦

『生成消滅論』(De gen.)の議論の中でアリストテレスが四元素の生成消滅について語る時、伝統的解釈では、その変化過程の根底を通じて存続する、現実的な規定を一切持たない純粋な可能態 (prima materia) が、質料的基体として想定されているものと理解されてきた。このような解釈に対しこれまでにいくつかの異論が提出され、伝統の枠にとらわれない解釈の可能性が議論されてきている。King⁽¹⁾は、生成の究極的な基体は四元素であるとする解釈を最初に提案し、prima materiaを存続体として仮定しない元素生成理論の説明を試みた。その後『自然学』(Phys.)の基体論の分析に基づき、Charlton⁽²⁾及びJones⁽³⁾は、アリストテレスはそもそも実体変化一般に関して基体の存続性そのものを認めていないとする、Kingの提案よりもさらに拡大された主張を展開している⁽⁴⁾。

確かに元素生成のメカニズムの理論的説明の中に見出される元素の質料についての記述は際立って不明瞭であり、一見多様な解釈を許容するようにも見える。しかしアリストテレスが元素の基に prima materiaを

想定しているかどうかという問題に判断を下すことは、そもそもどのような経緯でアリストテレスが元素の質料という考え方に至ったのかを、*De gen.* の文脈に沿って理解した上でなされなければならないと思われる。本稿は、とりわけ存続体として原理的に把握された質料概念の持つ意味に着目し、それが議論上果たす役割を認識することで、可能な解釈の幅が必然的に狭まってくることを示そうとするものである。

I

『天体論』(*De caelo*) III.3冒頭の定義によると、元素とは、他の諸物体の内にある構成要素であり、それらがそこへと分割される(διαρῆται) 最終的な素材であるが、それ自身は他のいかなるものへも分割され得ないもの、とされる(302a15-25)。アリストテレスが元素を合成体(σύνθετα)でなく単純(ἀπλά)だとする時、その意味は従って、元素が下位の、より単純な構成要素からなるものではないことと理解されている。元素の持つこの性格が重要な意味を持つことになるのは、その生成を説明する際である。*De caelo* III.6, 305a14-32でアリストテレスは、元素が非物体的なものから生じたと考える事は空虚の離在を前提することになるから不可能だとした後で、物体的なものから生じたと考える事も、元素に先立つ、元素とは別の物体を前提する事はできないために、同様に不可能だと指摘し、その結果元素の生成の説明は、元素間の相互生成という形で行なう以外にないと結論することになる。

De gen. II.4冒頭はこの元素間の相互生成という理論をすでに了解事項として提示している(331a7 ff.)。この時上述のような議論を踏まえていると考えるなら、ここでも同様にアリストテレスは生成のための最下の基体を四元素と見なしていると考えられる。この理解は述語付けの基体という観点から元素を捉えることで裏付けられる。すなわち、I.4, 319b8-10においてアリストテレスは ὑποκείμενον という語を、「属性(πάθος)に関し本来的に言われるもの」としているが、これは四元素

については言えても、prima materiaには妥当しない規定である。まず四元素は、合成物体と同様、それが生成したものとしてそこに現実的に存在するのであれば属性の主語となり得る。合成体であるか単体であるかの相違は、基体の規定への適合性に影響しない。これに対して現実的な存在以外の基体——prima materiaを想定すべきであるとした場合の困難の方は重大である。何故なら、限定された (τόδε) 存在でない純粋な可能的存在に、質や量など述語規定一般が現実的に属し得るのかについてアリストテレスは、そのような事態が生ずるとすると、(1) 述語規定を持たないものの独立の存在を認めるか、「有らぬものからの生成」を認めるかのいずれかの困難に陥ることになり、また更に、(2) 存在や実体が属さないものに他の述語規定が属するとすれば、「属性が離れてある」ことになるために、不可能だとしているのである (I.3, 317b23–33)。この発言の前半部を根拠に prima materia の存在を疑問視する見解⁽⁵⁾ に対しては、ここでは単に prima materia がそれのみで現実に存在する事が否定されているのであって、思考上それを分離して捉える事までが否定されているのではないとする伝統的な解釈に基づく反論が当然予想されよう⁽⁶⁾。しかしながらこの反論は後半部に関しては効力を持つものと言えない。伝統的解釈では prima materia は何らかの規定を伴ったものとしてのみ存在するものと見なされるのであるから、両者の結びつき自体には問題はないと前提しなければならないが、後半部を見ると、ここでは純粋な可能的存在に述語規定が属するという事態そのものが否定されているのである。これに従うなら、伝統的解釈のように、現実的に存在しているものを可能的存在と述語的属性との結合として考察すること自体不可能とならざるを得ない。この論点は可能的存在の離在性とはあくまで別個のものである。つまりアリストテレスは、生成消滅の根元に可能的存在を（たとえ思考上であれ）、想定すること自体をも含めて、誤りだと判断しているのである⁽⁷⁾。元素は従っていかなる種類の質料的素材からなるのでもない（そこに解体され得ない）、最下の主語基体として存在するものである。

だが他方、上述の議論に反して、*De caelo, De gen.* 双方とも、四元素が共通な質料をもつ事を示唆する記述を含んでいるのも事実である。まず *De caelo* IV.5において元素の数とそれぞれの固有の場所への移動傾向との関係が叙述される際、「質料はそれら (sc.元素) と同数、すなわち四つ」あるが、四つでありながら「全てに共通の質料は一つ」だと述べられている (οὕτω δὲ τέτταρας ὡς μίαν μὲν ἀπάντων τὴν κοινήν)。「殊にそれらが相互に生成するとすればなおさらそうである。ただ〔一つであっても〕そのあり方 (τὸ εἶναι) は異なるということである」(312a30-33)。また *De gen.* II.1, 329a24 ff. においても同様の発言がみられるが、これは『ティマイオス』におけるプラトンの「受容者」や「平面」を元素の質料として不適格であるとして退けた後を受け、元素生成に関するアリストテレス自らの考察への導入部をなしている箇所であるだけに、より重要である。

これに対し我々の主張するのはこういうことである。すなわち知覚可能な物体には質料があるが、それは離れてあるのではなく、常に反対対立を伴っている。そして要素と呼ばれるものはそれから生ずる、ということである。これらに関しては他の著作の中でより詳しく規定されている。(II.1, 329a24-7)

「それから」の先行詞は質料と反対対立のどちらとも解し得るため、King は反対対立の方をとって、(質料からでなく) 反対対立から質料が生ずる、と解し、やはり記述上元素の質料を消去しようとした⁽⁸⁾。しかし Joachim (1922) に従い、ここでアリストテレスが *Phys.* I (とりわけ I.6-9) を指示し、ここでは、質料として変化の基に存続する基体と、反対対立すなわち置換される形相と欠如、という変化一般に関わる原理の存在を確認していると考えらるなら、*Phys.*において生成の起点 (ἐξ οὗ) でありかつ内在 (ἐνυπάρχειν) する素材でもあるものと述べられている質料の方を先行詞と考えた方が用語法としては妥当であろう。実際後続の記述を見れば、そのように解する以外選択の余地がないと思われる。

しかしながら、第一の諸物体もまたそのような仕方、質料から (ἐκ

τῆς ὕλης) 生じてきているのであるから、これらについても規定しなければならない。その際我々は、離れて存在しないが反対対立の基にある (ὑποκειμένην δὲ τοῖς ἐναντίοις) 質料が始源であり、第一であると考えなければならない […] (II.1, 329a27-31)

初めに見たように、元素はそこから分離抽出し得るような素材に還元される事のない物体だとする判断に基づいて、相互変化による生成という解釈が提出されたのであるが、アリストテレスは同時に、変化一般について適用される原理（形相／欠如、質料的基体）が、元素の相互生成の説明にも同様に適用されなければならないという、理論的な要請にも答えるべき立場にある。つまり質料的素材から成るものではないとされた元素の生成理論においてなお、その生成が変化である以上、何らかの質料概念による原理的説明が行われる必要があるとされるのである。このような事態が矛盾を含むものでないかとするにはどうしたらよいか。

II

ここで質料と言われる事の意味を把握し直すため、*Phys.* I.9 (192a31-32) の、質料とは「各々の事物の基にある第一のもの」(τὸ πρῶτον ὑποκείμενον) すなわち「そこから何ものかが生じ、その何ものかの内に内在しているもの」のことを指す、とする規定の意味にあらためて注意を向けなければならない。この意味するところについて、これに先立つ192a25-31の記述からより踏み込んだ解釈を引き出す事ができるように思われる。まずそこでは質料的基体の両義性を踏まえ、「内に欠如を持つもの」としてはそれは消滅するが、「可能的なもの」すなわち欠如を伴わない質料としては「生成も消滅もしない」と述べられ、可能態としての質料の永続性、連続性について指摘がなされるのであるが、この時、それが生成したものでないことの理由が「もしそれが生成したのなら、起点でありかつまた内部素材となるような何ものかがまず基になければならない」と語られた後で、それこそが「質料の本性」であると

されている点に注目しなければならない。この発言においては、最初に起点であることと現時点で内在要素であることがあくまで一つの本性として質料を原理的に位置付けるものとみなされている（τὸ ἐξ οὗ ἐνυπάρχοντος）。このことは、質料が二通りのあり方をするのではなく、それが変化過程の起点と終局の両時点において存在していること、従ってその間存続していることが、質料の原理的性格であると考えられていることを示している。アリストテレスが質料の本性とするのはその性格であり、質料が「存続し、形態と共に働く原因」（ὑπομένουσα συναίτια τῇ μορφῇ）（192a13）として記述されるのもまさにその意味である。質料が「基にあるもの」（ὑποκείμενον）とされる時、原理的な意味においては、従って存続体としてのあり方が認識されていると考えられる⁹⁾。例えば彫像を青銅から作り出す場合、青銅は生成に先立つ起点に存在し、そこから彫像が生じた時点でその内部素材となっているために、質料と呼ばれるが、既に存在者となっていることや、構成要素としての素材であることが、ここで質料の条件の一部となっているのではない。青銅は、それが変化過程の基に存続し、それによってその変化が一つの連続した過程であることの原理的説明を可能にする要素であるために、質料と呼ばれるのである。ある何かが質料と呼ばれるのは、質料が原理として果たす役割をそれが果たすからであり、その役割とは、生成の前後で置換される欠如と形相の「基にある」ことである。置換される原理に対し、それらが置換される間、存続する原理が質料なのである。

そこで元素生成理論に戻ると、確かに *De gen.* I.4 における、属性の主語（ὑποκείμενον）という規定から言えば、その意味での最下の基体は、それ自体現実的な存在者でなければならない以上、元素以外にあり得ず、また元素は解体されない。ただ、*De caelo* III.3 で元素がそこから抽出可能な素材に還元されないとされた意味は、四元素が構成素材としての質料を持たないということであって、このことが直ちに、元素の相互間変化においては、その基にあって変化過程に連続性を保証するような存続体は何もないと判断されているということの意味する訳ではない。

*Phys. I*が求めるのはあくまで生成における存続原理の存在であり、その意味での質料的基体は、存在である事も内在要素である事も直接には要求されていないのであるから、両箇所での議論の結論とは別にその要求に答える努力がなされているとしても矛盾とは言えない。II.1の発言はそれ故、既に要素の相互的生成という現象の存在を同意事項として提示した後、今度はその相互的な生成がいかになされるかを記述するに当たって、元素の質料を存続原理として抽出する作業が必要となることに触れているものと解してよいように思われる。それは分析的な作業であって、元素を素材に解体することとは異なる。

それでは存続する質料としては何が考えられているとすべきか。II.1, 329a27以下に続くアリストテレスの言葉は次のようなものである。

しかしながら、第一の諸物体もまたそのような仕方では、質料から (ἐκ τῆς ὕλης) 生じてきているのであるから、これらについても規定しなければならない。その際我々は、離れて存在しないが反対対立の基にある (ὑποκειμένην δὲ τοῖς ἐναντίοις) 質料が始源であり、第一であると考えなければならない (というのは、温が冷の質料なのでも冷が温の質料なのでもなく、むしろ基にあるもの (τὸ ὑποκείμενον) が両者の〔質料〕だからである)。それ故まず第一に、可能的に知覚され得る物体が始源であり、第二に諸々の反対対立すなわち温や冷といった〔対立性質〕がそうであり、そして三番目に、火や水やそれに類するものがそうである。これらのものは互いに変化し合うが〔…〕、反対対立の方は変化しないからである。(II.1, 329a27-b3)

Kingは元素が質料から生ずると述べられているとするテキスト解釈を回避しようと試みながら、329a27以下の記述に関しては、元素の質料のテキスト上の存在を認めざるを得なくなっている。すると、元素は元素自身を質料とする、つまり自らの生成過程の基に自らが留まるという解釈を生ずることになるが、Kingはこれを、反対性質の基にあるとされているのはまだ特定の元素として限定される以前、類的に一つの質料としてあった時点での四元素のことを指すと解することで説明し得る

と考えた。つまり、この質料が特定の反対対立による限定を受けることで元素が種的に限定される、という説明において、元素とその質料とは同じ始源の持つ異なる側面を意味するとしたのであるが、これには、a33以下「可能的に知覚され得る物体」「対立性質」、そして四元素が、三種類の異なる始源として挙げられているという事実が対立する。Kingはこれらが、同一の始源の三段階の存在レベルを表わすものと理解しようとするが、テキスト上主語と術語を入れ替えて読むのでもない限りこのような解釈はパラフレイズとしても不可能である⁽¹⁰⁾。

単純物体である元素を最下の基体として把握するKingの姿勢は正当であると思われる。だが実際には質料原理を含んだ元素生成理論のモデルを何らかの形で提示せざるを得なくなり、その理論立てにおいてはKingは論理を誤ったとせざるを得ない。しかしそれならば、ここで対立性質の基にあるとされるものを *prima materia* と見なす伝統的な説明図式が有効なのかといえ、やはり問題がある。次章ではそれを具体的に示した後、*prima materia* によらない元素生成理論の解釈、存続体の最終的同一という問題への回答に取り組む。

III

生成の基体となって形相による限定を受け入れる純粋な可能態を想定することの正当性は以下に挙げる *De gen. I.4* 主要部の議論の解釈によって最終的に否定されると思われる。この箇所はアリストテレスが生成消滅をどのような観点から、性質その他のカテゴリーにおける変化と区別する必要があるのか述べるくだりであるが、基体概念の把握のされ方とその存続性への言及に注意が必要である。

生成と性質変化についてそれらがどう異なっているのか述べよう。というのもそれらが互いに異なっていると我々は言うからである。ところで、一方に基体 (*τὸ ὑποκείμενον*) があり、他方それとは別に、本来基体について言われる属性 (*πάθος*) があり、そしてこれら両者に

変化があるのだから (I.4, 319b6-10), 性質変化が起こるのは, 基体, それも知覚可能な基体が留まりながら (ὑπομένουτος τοῦ ὑποκειμένου, αἰσθητοῦ ὄντος) それ自らの属性 (対立性質であれその中間であれ) において変化する場合である (例えば身体が, 同一のものとして留まりながら, 健康になったり再び病気になるとか, 青銅が, 同一のものとして留まりながら, 丸かったり角張ったりする場合), (319b10-14)

これに対して全体が変化し, 何らかの知覚可能なものが同一の基体として留まらずに (ὅταν δ' ὅλον μεταβάλλῃ μὴ ὑπομένουτος αἰσθητοῦ τίνος ὡς ὑποκειμένου τοῦ αὐτοῦ), 例えば種子から全体として血が生じたり, 水から空気, あるいは空気から全体的に水が生ずる場合のようであるなら, それは或るものの生成であり, また他のものの消滅である […]. (319b14-18)

まず属性の主語とそれについて述語されるもの, すなわち述語規定を付带的に受け入れるものとそれに付帯する属性という「基体」「属性」間の関係が対比され (319b6-10), 性質変化と生成消滅は, 属性における変化と基体 (主語) そのものにおける変化, という形で区別されるのであるが, 基体の存続性に関する言及がここでは重要である。性質変化の場合, 属性の変化の間基体が「留まる」とされるのに対して, 生成消滅では基体全体が変化するため, 「同一の基体として留まらない」。だがそうすると, 伝統的解釈では *prima materia* は形相的限定を受け入れるものであり, 属性の主語となるものと見なされる以上, これを生成における存続要素として置くことの意味はつまるところ, 性質変化について用いられた説明と全く同様の仕方で生成消滅を説明してしまうということに外ならない (存続する *prima materia* —属性の主語—における属性の置換)。この点について伝統の側は, 319b10-14の中で性質変化の基体について「知覚可能な」という限定が加わっていることが生成消滅との区別に関して意味を持つと解し, 319b14-18の記述の意味を, 知覚可能な基体すなわち結合体としての現実的存在は存続しないが, 知覚さ

れない基体である *prima materia* は存続する、と解釈を補って理解することで問題を回避してきたのであるが⁽¹¹⁾、無論そのような基体が存続することに 319b14-18 の発言が間接的に触れているものと解する必然性はない。そもそも、ここ以外で性質変化の条件に触れていると考えられる箇所 (I.1, 314a8-11; b1-4; b29-315a3) を見ると、基体の可知覚性についての言及はなされておらず、単に変化の基底に「一つ」のものを想定しただけでその変化は性質変化と見なされねばならないと考えられているだけである。「[そうした変化においては] 基体が常に同一のものとして留まっているが、そのような変化を我々は性質変化というからである」(3134b2-4)。この記述と 319b6-10, 319b10-14 が異なる内容を提示しているのでないならば、むしろ属性の主語となるような基体が同一のものとして存続することこそが性質変化であるための条件であり、知覚可能性という観点はそこに関与していないとすべきであろう。そしてもしそうだとすると 319b14-18 の意味するのは、生成消滅の場合、属性の主語となるようないかなる基体も留まらないということである。つまり *prima materia* は生成に関与し得ないということである。さらに伝統的な解釈にとって致命的となるのは I.4 内部の記述との対立である。

それ故、反対対立間の変化が量に関する場合は増大と減少であり、場所に関する場合は移動であるが、他方の項〔生じたもの〕がその属性ないしあらゆる意味での付帯性となるようなものが、何も留まらない場合 (ὅταν δὲ μηδὲν ὑπομένη οὐ θάτερον πάθος ἢ συμβεβηκὸς ὄλως), それは生成であり、〔反対の変化は〕消滅なのである。(I.4, 319b31-320a2)

属性の主語としては「何も留まらない」とされる以上、生成消滅におけるその存続性を読みとることが全く不可能なことは明らかである。にもかかわらずこの記述は伝統的には黙殺されてきた⁽¹²⁾。だが上に見た I.1 における性質変化の条件提示と対をなすものとしては整合するものと言え、退ける根拠はない。もしこの記述が意味をなし、アリストテレスの思考が一貫していると考えらるなら、選択肢は *prima materia* の生成

消滅における存続という発想を退けること以外にないと思われる。

さてそうすると生成過程に存続体は存在しないのかと言えば、前節までに見たように、そのように考えてしまっただけでは生成の原理的説明が成立せず、短絡できない。そこでアリストテレスの次の発言の解釈が問題になってくる。

第一義的な意味での質料とは生成と消滅を受け入れてその基にあるもの（τὸ ὑποκείμενον γενέσεως καὶ φθορᾶς δεκτικόν）である。だがある意味でその他の諸変化の〔基にあるもの〕である。というのは、基にあるものはすべて何らかの反対対立を受け入れるのであるから。（320a2-5）

この発言は、もしὑποκείμενονの語義が章全体で一貫しているとするなら、生成における主語基体の存続性が否定された319b31-320a2の内容と明らかに矛盾するものである⁽¹³⁾。しかし319b6以降、ὑποκείμενονという語は置換される属性の主語となるような現実的存在として、常に述語との関係の下に用いられてきたのに対し、320a2-5でそれが用いられている文脈は異なっている。ここでは「質料」が生成消滅においてὑποκείμενονとなるものを指すとされているのだが、この場合過程の「基に存続するもの」という意味は自然に了解されても、それが「対立項の他方〔生じてきたもの〕を述語として持つ」かどうかの観点がここで意味を持つようには見えないのである。「生成消滅においては他項を述語として持つようなものは同一のὑποκείμενονとして留まらない」という叙述と「第一義的な質料は生成消滅を受け入れるὑποκείμενονである」という叙述においては、従ってὑποκείμενονという語に含意されているものが異なる可能性がある。つまり後者においては「存続体」、前者においては「属性の主語」に意味が限定されている（だからこそ前者の場合「留まらない」という規定の加わることが語義に反しない）と解釈するなら、生成の基体についての一見矛盾した二つの発言の真意を推し量ることができるように思われる。確かに、性質変化に倣って、生成した事物（例えば彫像－青銅の像）を、その起点にあった事物（像とは

違う形の青銅)の属性と捉える事はできない。この場合、基体から他の基体へと「全体が」変化しているのであって、それ故起点にあった事物は形相(像)を得た時点で消滅するからである。しかしこの場合でも、結合体としての事物の質料(青銅)に関して言えば、それは生成の起点から終局まで存続する。つまり、生成においては、属性の主語とならないような存続要素があり、そのような要素を第一義的な意味での質料として位置づけているのが320a2-5の発言なのではないかと解し得るのである⁽¹⁴⁾。この解釈を経て、II.1の文脈に再び合流することができる。アリストテレスが主語となりうる最下の基体として元素を記述しつつ、その生成において質料として働く何らかの存続要素を「第一の」始源として提示する時、I.4で言及された、属性の主語とならない基体、純粋な存続体としての質料概念を念頭に置いていたと解釈されるのである。

それではその存続質料は何であると同定されているのか。II.3以下説明される具体的な相互生成のメカニズムに目を向けることにする。まずアリストテレスの理論においては、元素は素材と形相との結合体ではなく、触覚に関わる二つの対立性質の「組み合わせ」(συζεύξεις)によって本性的に規定されるものとされる。そしてこれらの対立性質の入れ替わりによって元素間の相互生成が起こると説明されるのであるが、その際、最も容易な変化は、対立性質の一方を共通に持つ二つの元素間における生成(土〔冷・乾〕—水〔冷・湿〕—空気〔温・湿〕—火〔温・乾〕—土〔冷・乾〕…)だとされている点が考察の手掛かりとなる(II.4)。というのも、アリストテレスが「割符」(σύμβολον)と呼ぶこの共通性質は、prima materiaによる説明モデルを退けるとすれば、ある元素から他の元素が生成する際の唯一の存続要素だからである。近年Gillは、この共通性質を「反対対立の基にある」質料と考えることで、prima materiaによるよりも合理的な、また記述上の矛盾を含まない解釈が可能だとする説を提唱した⁽¹⁵⁾。この説が有意義なのは、置換される対立性質(属性)を受け入れる、より下位の何らかの基体(主語)を存続体とした際、元素生成と性質変化との区別がなくなってしまう、とい

う上述の困難（この困難のために *prima materia* は退けられる）に直面しない、という点である。共通性質は存続要素ではあるが、しかし主語として存続するのではない。元素内部の二つの性質はどちらも単純物体としての元素の本質の側面を成すものであって、両者は限定、付帯関係にないからである⁽¹⁶⁾。つまり、他方の対立性質が入れ替わる間存続するこの共通性質は、属性の主語とならない純粋な存続要素である。従って最下の基体である元素の内部が「説明〔形相〕に相当するもの (*κατὰ τὸν λόγον*)」と「質料に相当するもの (*κατὰ τὴν ὕλην*)」(317a23-4) とに分析される際、入れ替わる性質が置換原理としての形相（及び欠如）であり、共通の「割符」として留まる性質が存続原理すなわち質料と見なされている、という解釈は非常に有効である。

これが実際アリストテレスの理解であった可能性は高いと思われる。だがここで Gill の解釈を取り上げるのはむしろ、それが上述した *ὑποκείμενον* の二通りの語義という問題に触れる観点を含むからである。Gill は I.4 に異なる二種類の *ὑποκείμενον* を読まず、この語が一貫して主語基体としての可知覚的全体を指すと主張し⁽¹⁷⁾、320a2-5 の「生成消滅を受け入れる *ὑποκείμενον*」の意味を、生成においては *ὑποκείμενον* 全体が（生成消滅を受け入れて）消失し置換されるために、存続しない、と理解することで、I.4 全体の論旨を統一しようとしている。つまり I.4 では一貫して、性質変化と生成消滅において、主語基体の果たす役割の相違〔存続する／置換される（存続しない）〕が対比されていると理解するのである。しかしながら Gill も認める通り、I.3、319b3-4 では、元素生成の基に存続する質料について「*ὑπόκειται* するものとしては同一のものであるが、その在り方は異なる」⁽¹⁸⁾と表現されているし、第 II 節で見た II.1、329a27-b3 もまた、対立性質の基にある存続質料を *ὑποκειμένη/-ον* と記述しており、I.4 以外については、*ὑποκείμενον* が生成における存続体を意味しないとする判断は妥当しない。上述のように本稿の考察は、むしろこの、*ὑποκείμενον* の持つ二通りの語義〔属性の主語／存続体〕の乖離という現実を受け入れる解釈を提案するものであ

る。この現実のために、直接にはI.4内部で見かけ上記述の食い違いを生じ、そのことが、この用語を使用しながらの議論を事実上停滞させてしまうため、元素生成の具体的メカニズムを描写する段階以後、存続要素に関するアリストテレスの発言が必要以上に婉曲なものになっているのではないと思われる。II.2以降、「割符」という用語が唐突に導入されると同時に「存続する」という表現が一切姿を現さなくなるのはこうした事情から理解されるべきだろう。そしてこのように見る限り、存続体の同定という問題への直接の回答に到達する過程で議論の一貫性を確保することにアリストテレスは成功していない。確かにGillに従って「割符」に質料的存続体の含意を見出すことは、解釈上正当であると思われる。だがアリストテレスがその記述に成功しているかどうかの判断は別に下されるべきというのが本稿の結論である。

これまでの議論を文脈に沿って振り返る。まず*De gen.*においてアリストテレスは、自然学において確立された、形相と欠如、質料的基体という変化一般の説明原理を元素生成の説明においても適用しようと試みるのであるが、そこには、元素の基に下位の何らかの存在を想定すれば、生成を主語における属性置換と見なすことになり、それを性質変化と区別して説明することができなくなる、という問題が存在する。このため、主語基体としては最下の存在として元素を記述しつつ、その生成において質料として存続する何らかの要因を記述しなければならず、結果的にὕποκειμενονの語義の乖離〔主語／存続体〕という事態を招き、議論の一貫性は不完全なものとなった。本稿では質料的存続体の同定という問題について、それを元素自身とするKingの説明は論理性を欠き、*prima materia*とする伝統的解釈はそれを主語基体として扱う限り成立の余地がない、という点は指摘するが、アリストテレス自身がこの問題への回答に成功しているとは判断しない。ただし解釈の可能性としては、それを「割符」として同定するGillの仮説を現在までのところ最も有力なものとする。

Gillの解釈に対して慎重な態度を取るの、それが、*De gen.*の存続体論を解釈する上で最も重要な鍵の一つとなるとと思われる *ὑποκείμενον* の多義性という観点を極力排しているという姿勢の故である。Gillは、性質変化において存続する基体を“persisting subject”，生成消滅において置換される（存続しない）基体を“*ὑποκείμενον*”，そして後者における存続体を“what underlies”と表記し分け、議論の混乱を避けているが、原文においてこれらは同一の語である。この問題を表面化させずに済ませたことが措置として適切であったか。事の是非ではなく、そのような思考をアリストテレス自身が果たして言語化し得たかどうか、判断に躊躇しないわけにいかないのである。この点では検証の余地が残るだろう。

注

- (1) King, H.R., 'Aristotle without Prima Materia', *Journal of the History of Ideas*, 17 (1956), pp. 370-89.
- (2) Charlton, W., *Aristotle's Physics, Books I and II* (Oxford, 1970), appendix.
- (3) Jones, B., 'Aristotle's Introduction of Matter', *Philosophical Review*, 83 (1971), pp. 474-500.
- (4) これらに対する批判については、Solmsen, F., 'Aristotle and Prime Matter: A Reply to Hugh R. King', *Journal of the History of Ideas*, 19 (1958), pp. 243-52; Robinson, H.M., 'Prime Matter in Aristotle', *Phronesis*, 19 (1974), pp. 168-88; Code, A., 'The Persistence of Aristotelian Matter', *Philosophical Studies*, 29 (1976), pp. 357-67を参照。
- (5) Charlton (1970), p. 135.
- (6) Joachim, H., *Aristotle: On Coming-to-Be and Passing-away*. A revised text with introduction and commentary (Oxford, 1922), p. 94; Robinson (1974), pp. 177-8.
- (7) Gill, M. L., *Aristotle on Substance* (Princeton, 1989), pp. 43-44を参照。なお、Robinson (1974) (前注)の反論は後半部への言及を欠いている。
- (8) King (1956), p. 381 ff.
- (9) 実体変化の場合、*ὑποκείμενον*は生成の起点 *terminus ex quo* を意味し、存続性の観念は含まれていないとする Charlton (1970)の主張に対して、Phys. I.9は有力な反証となると思われる。Robinson (1974), pp. 173-175を参照。
- (10) Solmsen (1958), p. 248。King自身、元素を類的に記述（質料、始源）しながらその種的に限定されたあり方（四元素）に言及するのは、アリストテレスの用語法の混乱のためとせざるを得ず、記述の整合性という点では解決を断念している。cf. King (1956), p. 383.
- (11) Joachim (1922), p. 107; Robinson (1974), p. 171
- (12) Joachim (1922), Robinson (1974) 共に、この箇所への言及はない。この問題について詳細は Gill (1989), p. 50を参照。
- (13) 伝統的見解をとる現代の解釈者は、これまで放置されてきた 319b31-320a2の記述

“Nothing remains”を取り上げてその解釈の可能性を議論するようになってきているが、この箇所との対立を解消することには成功していない。cf. Williams, C. J. F., *Aristotle: De Generatione et Corruptione* (Oxford, 1982), pp. 102-3. Bostockは、基体が存続しないということは元素生成の場合にしか妥当せず、生成一般の説明としては不適切であるにもかかわらず、そのことがアリストテレスによって十分に意識されていないという事実が困難の根底にあると理解している。例えば青銅から彫像が生成するという変化の場合、青銅そのものに関して言えば、像という形状は付帯性にすぎないのだから、それは性質変化であり、従って基体（青銅）は存続する。このように本来変化とは生成であると同時に性質変化でもあり得るのであるが（*Phys.* 1.7, 190b5-9）、こうした視点を排除し、両者を排他的概念として取り扱ったことが*De gen.*におけるアリストテレスの誤りだとBostockは結論している。cf. Bostock, D., ‘Aristotle on Transmutation of the Elements in *De Generatione et Corruptione*’, *Oxford Studies in Ancient Philosophy*, 13 (1995), pp. 217-29. 次注参照。

- (14) この問題は*Phys.* Iで議論される基体概念の両義性（第II節を参照）と密接に関係しているが、元素生成について見る場合、問題を専ら*Phys.*の射程内で処理する事はできない点に注意が必要である。例えばCode (1976)は、変化が生成であるか性質変化であるかの判断は、欠如（存続しない）と質料（存続する）のどちらを基体と見なすかの判断に依存するのだから、生成についても、質料を基体と見なすことでそれを性質変化として扱うならば、基体が存続すると言われて構わない、とする解釈に基づいて、基体の存続性を巡る*De gen.* 1.4, 319b14-18と320a2-5との記述の相違を理解しているが、ただこう述べただけでは、元素生成に関して適用しうる説明を行ったことにならない。元素は性質変化の基体（属性の主語となり得る基体）としては最下のものであり、もはやその生成を、下位の質料に関する性質変化に還元することはできないからである。
- (15) Gill (1989), pp. 67-82 and appendix. “σύμβολον”を共有しない元素同士の相互生成(II.4, 331b4-11)の説明については、pp. 73-5を参照。
- (16) 元素以外の結合体の質料と形相は無論、当の結合体にとっては本質的結合であっても、その生成がより下位の質料を主語基体とする性質変化と見なされる限りは、単なる付帯関係にある。注(13)(14)参照。
- (17) Gill (1989), pp. 55-7. Gillの文脈では〔性質変化の主語基体／生成の主語基体〕という伝統的な図式が念頭に置かれている。確かにこの図式では生成を主語基体上のπρόσ置換と見なすことになり、319b6-10の規定が無意味になってしまう。本稿の提案する〔主語基体／主語とならない存続体〕の区別はこの点に配慮した解釈である。
- (18) cf. *De caelo* IV.5, 312a30-33. 第I節参照。

（哲学科 非常勤講師）